サラリーマンの
着衣エロは最高です！

「上の連中には無理難題のノルマを押しつけられるし、それを達成しようとすれば、下の連中に不平不満をぶつけられて抗議されて恨まれるし、あー！中間管理職って辛い！
つれてきたこの糞部下もさあ！仕事ができないうえに、根性がひん曲がっているから、ハラスメントで訴えられたくなければ、酒を奢れだとさあ！ひどくないか！？ひどいよなあ！？聖夜ああ！」

こういう場合、冗談と受けとめて「もー勘弁してくださいよ！係長！」とおどけるのが正解なのだろう。
そう頭では分かっていても、発言の一から十まで嘘となれば、なんだ

か調子を合わせられず。

「このままでは空気が最悪になる・・！」と焦りながら、金魚のように口をぱくぱくさせたら、ふと聖夜が目をあわせて、でもすぐに視線を落とし「それは大変でしたね」と宥めて係長をソファに座らせた。それから三人で酒を飲んだのだが、聖夜はおっとりとしたそのペースを崩さず、飄々としたまま。

もちろん係長は俺にいやがらせをするためにホストの店につれてきたわけで、聖夜と親密に交流するのを見せつけ、これでもかと疎外感や気まずさを味わわせて、たまに「こいつ社会不適合で、まともに会話できないんだよ！」と急に殴りかかるように暴言を。
対して聖夜は俺を庇うでもなく、悪口に乗っかるでなく、赤ん坊をあやすようにひたすら慰めて、たまに係長の目を盗み、俺に顔をむけて

困ったように笑いかけた。

濡れた布がへばりつく感触が意識されて、スーツフェチらしい彼の目に自分がどう写っているのかと想像すると顔から火を噴きそう。乳首だけを視姦するように粘着質に眺められつづけ、羞恥心を煽られまくった挙げ句に「ああ・・・すばらしい、窮屈なスーツを着て、びんびんに立つ乳首を隠せない黒部さん、すばらしすぎる・・・！」と誉め殺しにされて、濡れた突起を扱かれてはたまったものでない。

いっそ裸で触られるほうがましなほど恥ずかしいし、濡れた布が張りつく突起をいたぶられると感電するように快感が走るし、ただ布越し

のせいか、どこかもどかしくあり、がまんができず、聖夜の股間に精液と先走りが染みたズボンをなすりつけてしまうし。

「ああっ、いい、いいよおっ、黒部さぁ、ああぁ・・！」と聖夜が射精しつづけているように喘ぐのにも、精液と先走りが混じってくちゅぬちゅぁぬちぬちぬぷぬぷにちゃにちゃあぁ！とすさまじい水音が立つのにも、耳が犯されるし。

「やあぁ♡聖夜さぁ♡だめっ、だめですぅ♡はひっ、だめぇ、だめええぁ♡」と泣いて顔をふりつつ、腰を密着させてすりすりしている俺は、とんでもなく間ぬけだし。

男色禁制の村で
神のような鬼のようなそれは
俺を孕ませて絶望させても
まだ足らない

一

一切の光がささない闇に包まれて、スマホをとりだしたくなるも耐えて息を殺す。
洞窟内、入り口からつづく本道のような長い穴があり、その横穴に身を潜めてどれくらい経ったか。

本道の穴が仄かに照らされ、人の足音と息づかいが聞こえるように。
岩を隔ててしずしずと人の列が通りすぎていき、また真っ暗になるも、しばらくしてきた道をもどっていった。

明かりと足音と気配が消えてから、岩から顔を覗かせてあたりをうか

がい、本道の穴へとでて奥へとすすむ。
そのうち天井が高く広々とした空間に踏みこみ、行燈の明かりが揺れるなか、中央でござの上に正座する白無垢の彼女に「クルミ！」と接近。

ふりかえったクルミは涙で化粧を剥がしながら「ウラくん！」とすがってきたから抱擁を。
その温もりに触れて胸を撫でおろすも、すぐに引きはなし「急いで！俺と着ているものを交換だ！」と脱ぎながら急かす。

俺は白無垢、彼女はぶかぶかの男物の服に着替えて、あらためて見つめあったなら「ウラくんは、だいじょうぶなの？」と心配そうに。

「神城屋の思惑や目的は分からないけど、生け贄が男だと知ったら抱

きようがないしあきらめてくれるだろう。
そりゃあ、めちゃくちゃ叱られるだろうし、村では肩身が狭くなるだろうとはいえ、どうせ駆け落ちをするんだ」

「抜け穴の近くの通りに車があるから。町のホテルで待っていて、なるべくはやく合流する」と口づけをすると、彼女は涙目で名残惜しそうな顔をしつつ、本道の穴へと走っていった。
その背中が闇に消えてから、あらためてあたりを見回すと、行燈に照らされる奥に棺桶のような木の箱が。

「儀式に使われるのか？」と訝しげに見ながら、これまでの経緯をふりかえり、つかの間、物思いにふける。

俺が住むのは村なれど、今の時代にあって過疎化を免れ、なんなら輝

かしい発展と繁栄を。
それを支えているのが、かけがえのない貴重な鉱石。

奈良時代のころから採掘され、昔は装飾品として、今はIT機器を製造するのに欠かせない素材として高価格でとりひきされている。
鉱石の採掘、加工販売を一手に担うのは、老舗の神城屋。

独占的に鉱石を扱っているとはいえ、莫大な利益を惜しみなく村のために費やし、おかげでインフラが整えられ、交通の便がいいし、生活がしやすいし、運輸の拠点になっているし、大型スーパーや全国チェーン展開する有名店が誘致され軒を並べて、遊園地や映画館を含む商業施設などの遊び場も盛りだくさん、おかげで就職先にも困らない。
昔から、そうして神城屋が村を栄えさせてきたから、地元民の多くは子孫代々、住みつづけ、移り住んでくる人も多く、人口は増えるばか

り。

過疎化の危機と無縁でいられるのは神城様様とあり、地元民も移住民も彼ら一族をありたがって尊敬し、また彼らが祀る神を崇めた。
いくら掘っても枯渇しないような鉱石を、その神がもたらしたとのいいつたえがあるからだ。

昔々、オオミカミの怒りを買い、出産を司るという神が地上へと堕とされた。
肉体をなくし、霞のような魂となって山奥をさ迷っていたところ子供と遭遇。

近くの村から山菜をとりにきていた子供で、思わず神はその子に憑依。
天界にいたころから人間の営みに興味があったのと肉体ほしさに体を

乗っとり、その意識の主体は神となって子供の魂は深い眠りに。

村にもどると、子供の一生を奪うことになったのを詫び、この肉体が滅べば、また村の子に憑依させてほしいと頼みこみ、見返りに金の鉱脈のような鉱石の採掘場を与えると提案。

了承した村では、宿主が死ねば、村の子供が一人選ばれて新たに魂が宿されるという形で、奈良時代から神は生きつづけ、今も俺たちにまぎれて生きているという。

ちなみに神としての記憶があったのは初めて子供に憑依したときだけ。以降は宿主を代えるたびに記憶がリセットされ、新たに宿った子供の記憶を引き継いでふつうの人間として生きるので本人は自覚がないし、俺たちにもだれが神の入れ物なのか分からないのだとか。

知っているのは選ばれし子供の家族、儀式をする神城屋の人間だけ。
まあ、あくまでいいつたえだから現代において丸々、信じられないが、それでも俺らは幼いころから「こいつが宿主かもしれない」となんとなく思い、お互いを尊重しあって生きてきたわけだ。

宿主の死によって儀式は執り行われるが、年に一回の祭りで、それを模した神楽を舞う。
村に代々住む子供が一人選ばれ、新たな宿主として紹介されて身を清めてから神々しく優雅に踊るのが名物。

が、そうした「神は子供に宿る」とのいいつたえは表むきであり、裏の面というか、真の宿主の交代は現代社会らしからず、血も涙もない惨たらしいもの。
そのことを恋人にふりかかった災いによって思い知らされたもので。

勇者が巨乳だからってこれ以上
俺の体にいたずらしないでください

俺は神に選ばれし勇者にして巨乳だ。
もちろん生まれつきでなく、伝説の剣をぬき神に聖なる力を与えられたと同時に胸が膨らんでのこと。

神曰く「張りつめた胸には聖なる力が溜めこんである」らしい。
さらに、そのお乳は仲間の傷を癒し、庶民たちの病を治すというので戦闘で負傷した仲間に飲ませたり、旅する先々で病気で弱り、くるしむ人々に与えたり。

いや、さすがに直接、吸わせるのはご勘弁だから、暇があるときに人目を忍んでお乳を搾って瓶詰め。

仲間が寝静まった夜に一人で瓶詰めをしていると「俺、勇者だよな？」と虚しくなることがあるとはいえ、不治の病を患った子が奇跡的回復をし、親が号泣して抱きしめる光景を思いだせば、夜な夜な乳絞りをする手を止められず。

乳絞りはまだ報いがあるからいいが、胸元だけ女らしい容貌になったことでの弊害は数知れず。
いちばん頭が痛いのは、仲間の野郎どもが性的な目で見てくること。

パーティーは俺を含めて七人で、女二人、男五人。
うち男三人に「揉ませて吸わせて」「一回でいいからやらせて」と日々、迫られている。

巨乳になっても性転換したわけでないし、そういう趣味でないから頑

として断っているものの、しつこく誘ってくるし、戦闘中も揺れるおっぱいを注視してげへげへしているし、ラッキー助平を狙って不必要な接触をしてくるし。
「だったら胸の谷間を覗かせる服を着なければいい」「さらしや包帯で胸を押しつぶせばいい」と指摘されそうなところ、神曰く「巨乳をできるだけ露出しないと力が発揮できない」らしいので（ほんとうか？）。

なんて諸事情があって助平野郎どもを挑発するように、胸を強調する服や甲冑を身につけざるをえず。
まんまと野郎どもが煽られたとして、神に与えられし聖なる力が胸につまっているとなれば、同意なしに触るのは畏れおおいようで今のところ無事。

仲間に視線で犯されるのは不快なれど、そうして身の危険を覚えずに

済むから、まだいいとして、なにより不愉快なのは武闘家の態度。
武闘家のフィンは気心が知れた幼なじみで、俺が勇者に選ばれ旅にでようとしたとき「俺がそばで支えてやる」とついてきてくれた頼もしい仲間。

はじめは同行をよろこび、年上とあってなにかと頼りにしていたのだが、旅して半年ほど経ち「お前が好きだ」と告げられて「フィン！お前もか！」と巨乳を揺らして激怒。
以降、仲間として最低限のやりとりをしながらも、昔のように心を許して接することなく、あからさまに疎ましがって避けている。

俺がそっけなくする理由に心当たりがないのか、不思議そうだったり悲しそうな顔をするのがまた許せない。
ほかの仲間のように、いやらしい視線を向けてこなくても、だ。

「お前もどうせ巨乳に勃起しているだけで、興味本意で抱きたいんだろ！」と怒りを引きずりつつ、仲間の助平野郎どもにも睨みを利かしつつ、魔王打倒の旅をつづけ、我が巨乳から搾りだしたお乳で人々を救っていったのだが。

巨乳になるまえは乳首を触ってもほぼ無感覚だったのが、今やばっちり性感帯になったようで、しなやかな指で扱かれると「や、やめぇ・・！でちゃ、もお、でちゃあぁぁ！」とすさまじく快感と射精感が湧いてやまず。
神は知っていたのか否か（いや、巨乳になったあとも抱きたがって、

乳首に熱視線を送っていたから、きっと知っていたな！）教えてくれなかたおかげで「あなた、今まで触ってきた女のだれより過敏で堪え性がないですね、勇者・・・」と低く囁かれてぞくぞくし、すぐにでも絶頂を迎えそう。

せめて魔王の目の前で精液を噴きたくなはなく、頑なに太ももを閉じるも、延びてきた触手がからみつき足をぱっかーん。
天井から吊るされての宙ぶらりん状態で揉まれると、より胸がぷるぷるするし、けたたましい鎖の金属音に追いつめられるようだし、触手の先っぽが太ももの際どいところをねちょねちょ撫でてくるし、お漏らしが丸見えで魔王にしゃぶられるように視姦されるしで「やあぁ！やめっ、くぅ、んああぁ、だあ、め、だめぇ、み、見るなあ・・！」と一物だけでなく、乳首の先っぽにも灼熱がこみあげてくる。

「ば、ばあ、ばかあぁ・・！そ、そんな目で、見るなあ、ひいぃ、ああうっ！なんか、でるう、胸からもぉ、なんかあ・・！んふっ、んひいい、だ、だめっ、だめえぇ、先っぽ、や、やめ・・！あ、あっ、あぁ、ふああ、だめ、だめえ、だめだあああぁ！」

制服フェチの
男子高生と
お巡りさんの
エロ事情
泣き虫

「なんで、こんなことするかなあ・・・」

机に頬杖をついてため息をつき、視線を向けたさきには小麦の色の肌に金髪の男子高生。
もともとはきめ細やかな白い肌に、艶やかな黒髪をしていたというに、なんとももったいない。

交番のまえを登下校するときに顔をあわせる同じ高校の生徒に聞いたところ、彼こと春田は剣道部でインターハイに出場したこともあるらしい。

が、怪我を負ったことで活動をつづけられなくなり、部活をやめたとたん、ちゃらい格好をして素行がわるくなったとか。

交番勤務の俺が認識し、関わっただけでも万引き、窃盗、かつあげ、親父狩りと枚挙にいとまがなく、その非行ぶりは目に余る。
訳がわるいのは、元剣道部とあって腕っぷしが強いのと、親が超権力者で超金持ちなこと。

元剣道部員であり、数々の真剣勝負をしてきた春田にして相手を脅して屈服させるのはおちゃのこさいさい、ときに争うことになっても鍛練で培った筋力でねじ伏せてみせる。
交番に引ぱってこようと、被害者が訴えようと、親が権力をふりかざし札束を積んで解決してしまうから、心から痛い目にあって懲りることがないのだ。

もちろん俺が諭したところで聞く耳を持ちやしない。
いくら親身に接しようと非行少年がなかなか改心しないのに苛だつより、自分の無力さを覚え、そも「金に困っていないのに、なんで？」との疑問を膨らませるばかり。

雑談には多少、応じつつ「どうしてこんなことを？」「なにか悩みがあるのか？」と核心をつこうとすれば、だんまり。
頻繁に顔をあわせ、つきあいが長くなっても頑なに心を閉ざし、非行を繰りかえすのが、そりゃあ心配で心配で。

先っぽに舌先をねじこみ「あああぁ❤し、死ねっ❤死ねええぇ❤」とさんさん罵倒喘ぎをさせて、尻の奥に指をイン。
すでに柔らかいのに頭に血を昇らせて「禿げ親父か？あいつか？どっちにしろ許さない。おしおきだ」と丸飲みをして顔を上下、荒っぽく指を抜き差ししてじゅぷじゅぷっじゅっぷぅん！

「やっ、やああっ、く、お、俺が、だれと、なにしようが、いいだろっ・・！お、おぅ、おしおき、てっ、お、お巡り、てめえが、男子高生、いやらしっ、目でぇ、見て、いやらしっ、こと、したぁ、だけえぇ❤ほっ、法を、冒涜、する、糞、お巡りがぁ・・！俺以外も、男子高生に、おしおき、して、犯して、じゃねえのおっ❤て、てめえが、逮捕っ、されろおおぉ❤死刑、なれっ❤死ね、死ねえっっ❤外道おぉ、お巡りぃ、死ねええぇぇ❤❤」

再び射精したところで顔をはなして、わざと制服と官帽にぶっかけさせる。
警察官の制服が性的嗜好どストライクな春田にしたら、自分の体液で汚してしまったさまが目の毒過ぎるようで「はああうぅんっ❤」と精液をすこし噴射。

俺は非の打ち所がない優等生にして隠れ不良。
シングルマザーで貧乏な家庭の逆境を乗り越え、将来は自分のような弱者を救う官僚になろうと高い志をもって奨学金を受けながら勉学に勤しむ苦学生。

文武両道で成績優秀なのはもちろん、内申点も満点だろう人柄で人徳もあり、まわりに嫉妬させないほど、いやみがない爽やかイケメン。
なんて存在がこの世にいるわけがなく、あくまで貧困から抜けだすためにまわりの理想像の優等生を演じて、でも性根は割りと腐っているから鬱憤を溜めこんでしまう。

そのストレスを発散するために薬を売って金をつくり、一円ものこさず散財してぱあっと遊ぶのだ。
とはいえ、警察に厄介になって人生を棒にふっては元も子もないので、

二重人格のように別人になって慎重に裏活動をし、飲酒、喫煙をしても決して薬には手をださず。

抜け目なく優等生ぶる俺だけに薬をさばくのもお手のもので、取りしきる人間に気にいられ、いつの間にか売人のまとめ役に。

昇格して報酬が増えた分、札束をまきちらすように夜のクラブで客全員に奢って、寄ってくる女子を何人を抱くなど派手な遊びをして、一転して日中は、我ながら反吐がでるような優等生ぶりっ子を演じ通していたのだが。

売人の一人が、隣の縄張りで薬をさばくというご法度を犯してしまい。

「てめえ、よくもやってくれたな？」とその売人のスマホから連絡を受けて指定された裏路地に跳んでいった。

待ち受けていたのは、ゴリマッチョな男を複数人従えた、ひょろりとして目のくまが目立つ男。
隣の縄張りのまとめ役なのか、自分も薬をやっているようで、けたたましく笑いながら、こちらの売人を蹴りあげる。

すでに暴行されまくった跡がある泥だらけの売人は死んだように声もあげず、突きとばされて俺の足元に。
「だ、だいじょうぶか？」と屈みこもうとし「じゃあ次はお前が落とし前をつけてもらおうか」と屈強そうな男を従えて接近してきたのに、身がまえた、そのとき。

「な、ななななな、なにをやっているんだ！きみたちいいい！」

途中で俺が腰を止めても気づいていなさそうに、自ら押しつけ「だめっ、だめたよぉ❤春田くぅ、ああっ❤お願ぁ、やめてえっっ❤」と先走りを俺のズボンになすりつけてくるのが、なんとも滑稽で卑猥。
「どう、お巡りさん？男子高生に乳首をいたずらされて気もちいい？ねえ、どうなの？」と嘲りで追いつめて、腫れあがった乳首を指でかりかりかり！と引っかけば「ひゃあぁ❤やめてっ、それえぇ❤やあぁんっ・・❤そ、そんな、固いのでっ、激しくうぅ❤だめっ、だめぇ、だよおお❤春田くううぅっっ❤❤」と背中を反らし、胸を寄せて谷間を見せつけるようにしてメスイキ。

息を切らし、余韻に浸って「はぅ・・あぁ・・❤」腰をくねらせるのをねっとり撮ってから、スマホをズボンにしまい、そのとき床にある

鍵を発見。
ベッドの下に腕を伸ばして鍵をとると、手錠を外してやり、ほっとした顔つきになったお巡りさんに「ほら四つん這いになって・・」と囁いて耳を噛む。

バッドエンド回避のため義父になった俺は悪役令息の寝込みを襲って真の愛を教えてやります

二十七才にして俺の初恋はまだだったのかもしれない。
これまで三人の女性と交際してきたが、彼女たちから告白され、彼女たちにフられて、さほど思うところもなく、流されているだけのようだったし。

比べて今回は熱烈な一目惚れ、彼女を見るたびに心拍数も体温も急上昇し、交流しているとこの上ない多幸感に包まれる。
ただし彼女は二次元の存在であり、乙女ゲームの主人公。

これまでゲームに疎かったから知らなかったが、ふつう乙女ゲームなるものの主人公、ヒロインは顔を見せないか、見せたとしてのっぺら

ぼうという。
プレイヤーが自分を投影させやすいように。

一方で俺が一目惚れした彼女は金髪青目の愛らしい令嬢で、ばっちり顔が描かれている。
それでも女性人気が高く、彼女たちが自己投影しやすいのは、十分に女らしくありつつ、どこか凛々しくあり、心の芯の強さがその表情や立ちふるまいに滲みでているからだろう。

あざとくなく、ぶりっ子でもない、たとえ王が相手だろうと媚びないとばかりに毅然としたさまに俺は惚れ惚れ。
時間が許す限り、ゲームに没頭して彼女と愛を育む日々を。

「いやいや、ゲームプレイすると、彼女がほかの男といちゃつくのを

見せられて嫉妬しないの？」とツッこまれそうだが、ノー問題。
俺が自分を投影するのはヒロインでなく、攻略対象すべてのイケメンキャラだから。

ヒロインを操作して、自分を投影するイケメンキャラと交流を深めて好感度をあげ、最後には華々しく結婚式をあげてゴールイン。
なんて我ながらややこしいプレイをして自己陶酔を極めていたところ。

ゲームがアップデートされて悪役令息なるキャラが新たに投入。
おかげで炎上しったらしいものを、もともとゲームに疎かったのと、ネタバレを目にしたくなく、ネットの情報を見ないようにしていたに、その騒ぎについて露知らず、いつもどおりプレイ。

新キャラの悪役令息、グリエはショタキャラで、ヒロインと同い年の

一七才なれど、見た目は十二、三才。
黒目黒髪の美少年ながらに目の下にどす黒いクマをこさえ、死んだ魚のような目をし、表情が陰鬱なら、性格も陰湿でかなりのメンヘラ。

「悪役」といってもメンヘラとあり、真っ向から喧嘩をふっかけず、陰謀を企てるでもなく、ヒロインが自分の意に沿わないことをすると「悲しすぎてぼく、そこの川に飛びこんでしまいたい・・」と自傷に走るふりをして脅してくる。
慌てて止めようとして従っているうちに、攻略したいキャラと引き剥がされてしまうわけだ。

ただ、いつ起きてもおかしくない、今、目を覚ましたら暴れられて、最悪、逃げられるかもと緊張して、震える手をグリエの下半身へ。おそるおそるズボンのもっこりを撫であげれば「はあぅ・・❤んんふっ❤」としどけなく悶えながらも、瞼をあげず。

男同士は未経験の俺にして上々の反応を引きだすことができ、すこしすりすりしただけで「あはあぁんっ・・❤❤」と射精。
やや冷静になって「まかさ精通しているよな？」と今さら、性犯罪者になったような疚しい心持ちになるも、彼女の命がかかっているとなれば、あとには引けず。

「グリエに彼女を重ねて見るんだ！彼女を愛するように抱くんだ！」
とこれでもかと自分に暗示をかけて、愛撫を再開。
シャツのボタンを外して露にした女性のように白い肌、ぷっくりした薄紅の乳首がこれまた幼さが際立って、劣情を掻き立てるようなれど
「ジュリアナの豊満な胸だと思うんだ！」と自分を叱咤して乳首をいじりながら、ズボン越しに扱く。

肌に直に触ったからか、胸の感度がいいのか「はうぅ、はあんっ❤んふっ、あっ、ああぁ❤」と見ているほうが恥ずかしくなるほど、あられもない痴態を晒してヨがりまくり。
そういう趣味でない俺でも悶々としてきて「いやいや！ジュリアナ！あくまで彼女を重ねて欲情してのことだから！」とだれにともなく、言い訳をするも、舌をだして物欲しそうにちろちろ動かしているのを目にしたなら、つい喉を鳴らして口づけ。

狭い口内を舐めまわすのに夢中になり、興奮するまま愛撫を盛んにすれば、すっかり濡れたズボンから耳にくすぐったいような水音。
にゅちゅにゅっちゅにゅちゅぅっ！と水音がたつように扱くと、恥ずかしいのか、いやいやとばかりに顔をふり、そのくせ積極的に自ら絡めてきたに、それを強くに吸って、乳首を爪で弾き、先っぽに指を押しこみぐりぐりしたら「んむううぅっっ❤❤」とまた、すぐに射精。